

ヘルマン・ヘッセ『クヌルプ』 読解

— 社会と自然の間の放浪 —

山 内 深 生

はじめに

作家ヘルマン・ヘッセは 1915 年にフィッシャー社から小説『クヌルプ *Knulp. Drei Geschichten aus dem Leben Knulps*』¹⁾を刊行した。行方も知らぬ根無草の生活が続けるクヌルプは自然の中で眠り、また時には友人の家を訪ね、宿や食事を恵んでもらう。作品の中に漂う雰囲気は、第一次世界大戦の影響を受け、ヘッセが自身の内面の危機と向かい合った結果として描かれた小説『デミアン *Demian*』のそれと比較すると非常にどこかで牧歌的であることがわかる。起伏のない安定した調子はヘッセのその他の作品に対して構造的複雑さを欠いているせい、重要視されてこなかった。従来の指摘ではクヌルプを他の作品の主人公と対照するもの²⁾や、『ロスハルデ *Rosshalde*』と合わせてヘッセの伝記的事実との相違を指摘するもの³⁾が多く、作品それ自体の研究はまだ充分とは言えないだろう。

Missenharter⁴⁾や Boulby⁵⁾は『クヌルプ』と後期ロマン主義の作家アイヒェンドルフ (1788–1857) との関係をあげている。彼の代表作『のらくら者 *Aus dem Leben eines Taugenichts*』(1826) はおおよその文量や、放浪や自然、芸術といったモチーフなど実際のところ共通する要素を持つことは確かである、ヘッセがアイヒェンドルフの熱心な読者であったことを踏まえればその翻案として『クヌルプ』が書かれた可能性は十分に考えられる。しかし辻は『クヌルプ』は『のらくら者』の系譜にありながらも、19 世紀初期とは異なる感性の働きのもとで描かれていることを指摘している⁶⁾。たしかに『のらくら者』の主人公タオゲニヒツに見られるような「愉しさ」はクヌルプには確認できず、クヌルプのもつ自身の人生に対する「後ろめたさ」とは対称的である。この差異はそれぞれの出版年の間に進行した社会制度の確立の中で考えられうる。

本稿の目的は『クヌルプ』を従来の抽象的な宗教文学として読むのではなく、19 世紀にかけて立ち上がる社会制度からの逃避が、到達することのできない自然への憧れの中で中断され、宙吊り状態で停滞する人間の物語として捉え直すことである。クヌルプが放浪を続ける動機について「放蕩息子 (der verlorene Sohn) の帰郷を父が受け入れるという愛の神秘主義による合一」⁷⁾や「クヌルプは雪の上に倒れ、彼の故郷の大地で亡くなる。彼は過去の放浪や最後の帰郷に満足するのである」⁸⁾とあるように、クヌルプの放浪がある設定された目的地を認め、そこへと到達する物語と定式化することが多かった。クヌルプが故郷に思い残した後悔と懐愁の念を持ち合わせていたことは確かであろう、だが帰郷それ自体を目的に据えるのであればクヌルプが故郷の周

辺である南ドイツを定住することなしに歩き続けた理由としては不十分である。むしろここで掘り下げるべきは、彼の歩行の動機が何かを「求めて」よりも、何かを「避けて」行われていたのではないかという点である。本稿ではこの点を制度の進展と共に人々の行動や態度が規定されていく過程と重ねていく。

ここで重要なのはクヌルプの放浪とは常に制度からの逃避の延長線にあるということである。クヌルプは社会制度と正面から対立することなく、彼の逃避の方法は制度、もしくは制度を体現する他者とはじめは歩調を合わせつつ、並列した行路を辿るものである。しかし同様の軌道を描きつつ、いつの間にその軌跡は他者と外れていくことになる。放浪－制度との邂逅－逃避－放浪といった運動がこの作品のダイナミズムであり、その道は社会から離れ目指されるべき自然へとつながっていく。

クヌルプがその都度、他者とどのように同調を図るのか、一方で彼が他者と食い違うのはどのような点であるのか。問題は愛、死、生といった人生の本質と関わることが、その不和の根本に据えられているということである。本稿の1章から3章にかけてそれぞれの項目を制度を体現する登場人物について触れ、そしてクヌルプがそこからどのような逃避＝放浪を見せるのかを検討していく。そして4章では逃避先に見据えられた自然が、もはやかつての「全体性」を持ち合わせていないことを同時代の哲学者ジョルジュ・ルカーチの議論を参照しながら考察していく。

1 愛——婚姻法——態度の屈折

本章ではクヌルプが漂泊の人生を歩む中で家族の共同性を忌避していることを示し、結婚制度との関わりでクヌルプが婚姻をどのように捉えていたのかを考察する。この点に関しては当時のヘッセの伝記的な事実との照応が試みられている。ヘッセは1904年にマリア・ベルヌーリと結婚し、1905年に長男ブルーノ・ヘッセが誕生した。家族との共同生活を送るため、ヘッセはガイエンホーフエンに新居を構えることになり、物理的に彼の行動範囲は家族を中心として制限されていく⁹⁾。しかし結婚生活は次第に破局へ向かい、家族関係の閉鎖性は彼を徐々に生き辛くさせ、そこから逃避するように行われたインド旅行も展望を開くことはなかった¹⁰⁾。『クヌルプ』執筆の背景にはこうした心理的、物理的な行き場のなさがあり、その裏返しとしてここまで開放的な作品が生まれたことは興味深い点である。

『クヌルプ』は1890年のはじめ(*Anfang der neunziger Jahre*)に遍歴職人として南ドイツを放浪するクヌルプが、深夜ロートフース家を叩扉する場面からはじまる。クヌルプは夫妻から厚い歓待を受けることになるが、職につき家庭を持つことを勧められるとそこに居心地の悪さを感じ始める。旧友ロートフースは訪ねてきたクヌルプをもてなし、屋根裏の簡素な部屋に案内すると別れ際にこのように言う。

「うん、あのさ」とロートフースは非常に熱心に言う。「さあ、君は今から屋根裏部屋の冷

たい職人の寝床に入るんだ。時にはもっと酷いベットや、それすらなく干し草で眠らなきゃならないこともあるだろう。けれど俺たちには家や仕事や可愛い妻がいる。いいかい、もし君がただそう望めば、俺なんかよりもずっと長く親方でいられただろうに。」

クヌルプはその間に大急ぎで服を脱いで、凍えながら冷たい夜具の中へ身を隠す。「まだあるのかな？」彼は尋ねた。「楽な姿勢をとって、聞こうかな」

「俺は真面目なんだぜ、クヌルプ」

「僕もさ、ロートフース。だが結婚は君の発明だとか、思っちゃいけないよ」(SW3.150)

ロートフースは放浪する友人を家庭へと固定させることを企てる。ここで重要なのは「結婚は君の発明だとか、思っちゃいけないよ」と言うクヌルプの発言である。ロートフースがクヌルプに結婚を勧めるのは強制民事婚成立からおよそ15年後、婚姻制度は国家によって「発明」された後のことである¹¹⁾。クヌルプが旧友に指摘するのは、彼が家庭生活から多くの幸福を享受しているからであろう、結婚を自分が考え出したかのような傲慢な身振りである。彼が満足し、またクヌルプに結婚を強く勧めるところから、ロートフースは疑いをもたず時流の制度に強く寄りかかる人物として描かれていることがわかる。

一方制度のもとで、ロートフースとは異なる態度を見せるのは彼の妻、リースである。彼女はクヌルプが家を訪れてから、彼の行儀の良いたたずまいや作法をみると、粗野な自分の夫とは対照的に魅力的に思えてくる。以下は彼女がクヌルプに傘を持っていくことを口実に2人きりとなって特別な関係を築こうとする場面である。

彼はでかけようと、下の玄関にいるとき、親方の妻が彼を追いかけてやってきた。彼女は傘を持ってきて、否応なく持って行かされた。

「あなたは自分を気遣わなくてははいけません、クヌルプ」と彼女は言った。「あと今のうちに、あなたが後で鍵を見つける場所を教えてあげます」

彼女は闇の中で彼の手をとって、家の角を回って、木の鎧戸で閉まっている小さい窓の前で止まった。

「私達はこの鎧戸の下に鍵を置いておくの」と彼女は興奮し、慌てた様子で教え、クヌルプの手を撫でた。「あなたは隙間に手を入れさえすればいいの。鍵は飾りぶちの上に乗っているから」

「はい。どうもありがとう」とクヌルプは当惑して言い、手を引っ込めた。

「帰ってくるまで、一杯のビールを残しておきましょうか？」と再び彼女は言い始め、ほのかに体を押し付けた。

「いや、ありがとう。僕はほとんどビールを飲みません。おやすみ、ロートフースの奥さん。どうもありがとう。」

「そんなにお急ぎですか？」と彼女は情愛深く言って、彼の腕をつねった。彼女の顔が彼の

顔のすぐそばにあった。当惑した沈黙の中で、力ずくで彼女を拒絶したくはなかったので、彼女の髪をその手で撫でた。(SW3.168-169)

ロートフースの妻は夫とクヌルプの3人で食卓を囲んだ後、彼が出かけようとする際にその場に駆けつける。彼女は彼の手を「撫でる」ことや、顔をそっと近づけることで、それまでの場面とは異なる身体的な距離の接近が描写され、クヌルプに積極的に言い寄る姿勢を見せる。こうした身振りは読者に不倫を予感させる、彼女はロートフースの妻でありながらクヌルプにも好意を覗かせる。それは制度からの逸脱であり、公的には承認されない行為である。もしこの気持ちを表すことができたとしたら、それは夫をも廃した私的な空間、クヌルプとしか目が合わないような2人だけの特別な私的領域においてである。クヌルプは彼女の態度に「当惑」を示さずにはいられない。このようなリースに見られる不倫のテーマはすでに1890年代にドイツ文学で主題化されており¹²⁾、制度の確立とその逸脱の傾向とに呼応している。

夫妻の間でクヌルプに見せる態度の差は明らかである、つまりここでロートフース夫妻は婚姻制度を主軸とした制度の内側にいる人間として描かれている。かつて共に旅をしていたクヌルプをロートフースはしきりにその内側へと誘い込む。しかしその中にいるのは社会的身分や立場を保証され幸福を享受するロートフースと、その夫に気づかれぬよう巧みに制度の逸脱を試みる妻であった。

以上の他者に対して、クヌルプが語るところから、彼がこの家族に対してどのように考えていたのかを検討していく。初めに引用するのは3人で談笑する中で、クヌルプの心理描写が引かれるところである。

小さい窓ガラスを通して、はかなく不確かな日の光が部屋へと流れてきた。その光は食卓とトランプを越して、床板でもろい輪郭の影を気まぐれに、また無気力にもてあそび、くるくる回って青く塗った天井でふるえていた。クヌルプはそれら一切を瞬きしながら見やった。2月の太陽の戯れや、この家の静かな平和や、友人の真面目でよく働く職人の顔や、可愛らしい夫人のヴェールを被ったまなざし。——それは彼にとって気に入らなかった。それらは、彼にとって、目標でも幸福でもなかった。自分が健康だったら、と彼は考えた。夏だったら、もうこれ以上滞在しないのに。(SW3.164-165)

ロートフース夫妻と食後にトランプを楽しむクヌルプは部屋の中に差し込む光をゆっくりと目で追い、焦点が細部へと絞り込まれていくと同時に、ふとこの空間に違和を感じ始める。これは彼の望んでいたものではなかった。クヌルプにとってこうした家庭生活は、まったく「気に入らない」ものとして看取される。彼は遍歴職人として生活する身である以上、「静かな平和」も家庭を支える「真面目でよく働く職人」も彼からは縁遠いものだった。しかし何よりロートフースの細君の「ヴェールを被ったまなざし (verschleierte Blicke)」こそが彼を苦しめる。彼女の

視線は結婚制度が担保する家族の形態において、クヌルプにとっていやらしいものとして映った。彼は今すぐ物理的なこの家からも、また心理的には彼女の好意からも逃げたかった。この家庭は少なくとも彼の落ち着ける場ではないのである。

クヌルプは彼女が向けるこうした視線を敏感に察する。リースとの関係はクヌルプを次第に窮屈にしてゆき、クヌルプの彼女自身への嫌悪へと変化してゆくことになる。その原因は同時に進行する郷愁を抱えた少女ベルベレとの好意的な関係を見れば、彼と向き合う際の態度の率直さに求めることができるだろう。ベルベレはクヌルプと話をしている、帰宅時間を気遣い、男の人と歩いているのを見られたくないことを正直に口にする。それに対して、リースは旦那と3人で食事をする際と、クヌルプと2人きりになる時の態度の違いを上記で見たように作品内ではことさらに強調している。素直なベルベレとそうではないリースという対称性は明らかである。そしてここで彼女の態度を屈折させているのはまさに結婚制度である。彼女が率直な好意を示すことができないのも、夫の見えていないところで態度が変わるのもこのためである。3人で一つの食卓を囲んでいるときにふと気づいたのは以下のこと、視線や態度が食い違いを見せ、非常に不安定ながらもなんとか「家族」という外形を保っているということの不気味さ、クヌルプはこれを「幸福」とは結びつけられなかった。彼の過去において愛は挫折の経験として存在していた。かつて愛は死とともに終わる永久の関係と考えていた、しかし関係は終わり彼も生き残ってしまった。そんな彼の目には夫妻の関係を繋ぎ止めているのは愛ではなく、「家族」という制度それ自体であると映った。その関係は「幸福」で装飾されながらも、内実は非常に空虚なものとして感じられたに違いない。しかしクヌルプはこうした家族に不満を持ちつつも、その実態を明らかにするでも、そこへ介入することも望まない。

皮なめし職人（ロートフース）の世帯や結婚の幸福についての立派なお話も、彼はある種のあざけりをもって思いだした。彼の幸福や徳を自慢し、威張ったとて大抵無意味だということを知っていた。繕い仕立て屋の敬虔深さもかつては同様に無意味だった。そうした愚行を傍観し、それらを笑ったり、同情したりすることができた。しかし、彼らを自身の道へと行かせねばならない。(SW3.170)

上辺だけの家族の幸福を憂鬱に思い「つばを吐き」(SW3.175)ながらも、クヌルプはロートフース家に帰ることになる。しかしそこでの行動は「傍観する」ことに限られる、あくまでも彼らの「その道」を阻害することはしないのである。妻に「彼女を拒絶したくはなかった」と語るところからも、リースと軋轢を生じさせない様な気配り、もしくは警戒心が感じられる。クヌルプは絶えず他者と対立を生み出さないよう注意しつつ逃避の方向を探る。それは他者からの逃避であると同時に、彼らをそのように駆り立てる社会制度からの逃避であるといえよう。

本章では結婚制度が構成する家庭の空間をクヌルプがどのように捉えているのかをみてきた。制度が人の態度や感情を制限し屈曲させている様子が、その外側にいるクヌルプにとっては非常

に窮屈に感じられる。だからこそ、何度もこの家を早く離れたいとクヌルプは考える、ただし内的な家庭生活も外的な社会生活も、もはや彼の安寧の場とはならない。次章ではその様子を医療の制度化の中で見ていく。

2 死 ― 医療制度 ― 生き延び

19世紀のドイツにおいては「ポリツァイ学」の発展が国家形成に大きく貢献することになった¹³⁾。この政策の中心は「人口をいかに増やすか」、という問題でありフーコーはここに「医療ポリツァイ」とそれを可能にする統計学を見る。前章で扱った婚姻法も医学や教育の制度化も広くはこの人口管理の政策の一部であるといえる。『社会医学の誕生』¹⁴⁾によれば18世紀初頭のドイツに導入された医療行政は網羅的な情報収集の組織化と広範な医学知識の標準化を推し進めた。また18世紀の後半には近代臨床医学の発展が試みられ、医療制度の専門性を高めていく。当時のドイツでは「人口をいかに増やすか」と同時に、国家を構成する「諸個人の身体の保護」が望まれたのである。

上記のような時代状況のもとで医者となった旧友マホルトと放浪途上のクヌルプが邂逅する場面から、「最期」の物語が始まる。マホルトはある婦人を看取った後の帰路であり、「もう手の施しようがなかったが、彼女は最後まで粘り強く闘った」(SW3.192)と回想しながら馬車に揺られていると、向こうから歩いてくるクヌルプと出会い、容態の悪さを察すると以下のように声をかける。

「いいや、そんなことは君の助けとはもはやならない。病人は寝てなくちゃならない。外に出るべきじゃないよ。」(SW3.194)

「だけど君はベットに入って、看病を受けるべきだということがわかるだろ。さしあたりは僕のところにいてもいい。そのあいだに最寄りの病院も気遣ってやるさ。君は憑かれているよ、クヌルプ。そしてもう一度自分の道を切り開くために、気を落ち着けるんだ。」(SW3.195)

マホルトはクヌルプを「病人」と断定し、放浪を中断して病院で看病を受けるように勧める。この時代は病院の数が急激に増加を見せる途上であり¹⁵⁾、病院の手配の際にはクヌルプがどこの病院がいいか要望を述べているほどである。マホルトは再び放浪を可能にするためにもここでは、病院で「監視」される必要があると説得するが、ここでの彼の言い方はその内実と相反するものである。というのもマホルトは家政婦に「あの男は長いこと生きやしない(nimmer lang zu leben)」(SW3.195)と伝えており、クヌルプがたとえ治療を受けたとしてもその命は決して長くは続かず、「もう一度自分の道を切り開く」ことも、彼が再び放浪することも、もはや不可能であることをすでに了解していたのだ。それでもマホルトは彼を病院へ送ろうとする、もしここ

で彼を見逃してしまったら自分は「だめな医者 (miserabler Doktor)」(SW3.201) になってしまふと語る。クヌルプを病院へ向かわせようとする動機はマホルトの意志ではなく、医者としての倫理である。その倫理はクヌルプに、彼の欲望とは無関係のところより「長く生きる」ことを強いる。しかしその犠牲として彼の放浪生活は病院の拘束を受けて、遮断されざるをえない。医者と患者という関係がここでの対話を困難にする、彼は命の続いている間に何とかして帰郷しなければならないのだ。

クヌルプは熱心に病院を薦めるマホルトに対して「僕の方が間違っていた」(SW3.201) と尽力に感謝すると、次の日 2 人は一緒に馬車で病院へ向かうことを了承する。しかし翌日の早朝に彼は故郷へ向かう馬車へ乗り込み、街の手前で降車するとその馬車を見送って「彼はふたたび自由 (wieder frei) になった! 彼らは病院で待っているといい」(SW3.207) と語る。ここでクヌルプはマホルトに本音を伝えず、賛同の姿勢を見せていても最終的には彼のもとから離れていく。両者の関係は横滑りしていき、拘束は免れ帰郷を果たすことになる。では結局、クヌルプがマホルトから離れる契機となった問題はなんだったのだろうか、これは 2 人の「死」の認識の差異に求めることができる。当時のヘッセのエッセイ、彼がマホルトに贈った詩の内容からその内実を探ってみたい。

Schneider は『クヌルプ』において、黒死病流行の際の臨終の手引書、アルス・モリエンディ¹⁶⁾に見られるような「良き死」への思考があることを述べる¹⁷⁾。物語が進展するにつれて、病状の悪化と共にクヌルプに迫る死のイメージは大きくなっていく。本作におけるヘッセの関心の一つに、クヌルプをどのように死と巡り合わせるのか、という意識があった。ではここでヘッセが考える「死」とは一体どういったものを想定していたのだろうか。『クヌルプ』執筆中の 1910 年のヘッセのエッセイ『旅への思い』の中で、このことについて示唆するコメントがある。

— だが、私たちはたまらなく死について知りたいのだ。つまりこの存在の最期の最も極端な体験についてだ。というのも一切の認識と体験の中で、喜んで命を捧げるようなものだけが、与えられるのに相応しく満足をもたらすということ、そのことを私たちは確信しているからなのだ。(SW13.190)

当時のヘッセにおいて「死」はただ生を終えることを意味しない。彼はむしろ自らの「命」を差し出すことで得られるような「認識と体験」をそこに期待しているのである。ヘッセの言い回しにはどこか「死」を強く切望するような高揚した調子がある。死は自らの生が終焉すると同時に、そこで迎えることのできる「最も極端な体験 (das kühnste Erlebnis)」を意味していた。ここで彼が強く知りたいと望んでいるのは以下のこと、つまり自らの死がその生と引き換えるにあたるような体験になりえるかどうか、ふさわしい死の体験となりえるかどうかということである。ヘッセは「死」を生との切断とは考えず、それは生が迎える最後の体験であるとした。以上を踏まえた上で、医療によって延長されることのない死をクヌルプは自然の中に見出している。

クヌルプはマホルトのもとを去る際に一つの詩を書き残した。この中には病態が悪化し顕在化してくる死の気配や、10月から眺めて感じられる春の訪れが描かれている。我々はここでマホルトと病院への忌避感を自然との対照で読み取ることができるだろう。

Die Blumen müssen
Alle verdorren,
Wenn der Nebel kommt,
Und die Menschen
Müssen sterben,
Man legt sie ins Grab.
Auch die Menschen sind Blumen,
Sie kommen alle wieder,
Wenn ihr Frühling ist.
Dann sind sie nimmer krank,
Und alles wird verziehen. (SW3.204)

ここでは人間と自然、人（Menschen）と花（Blumen）が等置されることで花が萎れていく（verdorren）様子と、自分が衰え死に向かっている（sterben）状況が重ねられている。やがて迎えることになる死は霧が来る（der Nebel kommt）ように、または春が訪れる（ihr Frühling ist）といった自然現象、自然の循環運動によって予感させられる。「Grab/krank」に関しては作中内で死を救済として考える場面の引用であることがわかる、肺病を抱えるクヌルプにとって迫っている「自然」な死がその「krank」からの解放を期待させている。そしてこの救済は容赦される（wird verziehen）という形で最後の神の登場を先取りしている。

クヌルプにとって死とは人間の身体の「自然な」衰弱として捉えられる、これに対しマホルトはその生を「自然に反する」かたちで、言い換えればその身体のための「生き延び」を優先する。彼はクヌルプをしつこく医療システムへと運び込もうとする。病院は病人を拘束することで生を持続させることに効率化されたシステムである、そこでは患者の欲望を遮断して死を遠ざける。だが、クヌルプにとって死ぬことは科学や社会のもとではなく、自然のそばで季節の巡りの中で迎えるものである。加えてヘッセのエッセイを踏まえばそこで「死」は苦しい現実からの救済のモメントとしてだけでなく、それが贈る「極端な体験」を期待していた。命、もしくは生きることがむしろこの体験に奉仕するものであって、無理に長らえることは彼にとって全く価値を持たないのである。こうした意識が彼の中に深く根付いていたとすれば、なるほど後述するクヌルプの臨終の間際、神との対話の場面はまさにクヌルプの命と交換して描かれた「極端な体験」であったのかもしれない。いずれにしても「どれほど長く生きるか」よりも「いかに死ぬか」ということこそ喫緊の重要な問題であり、マホルトとの訣別はこうした認識の差にその原因があっ

たといえる。

3 生 — 教育制度 — 目指すべき資格社会

医学の発展で人々の生が管理されるようになる過程と同じくして、教育の面でも組織化と規範化が起こる¹⁸⁾。一連の中等高等教育の改革は「試験に合格さえすればエリートの道が開かれることになり、身分、階層的な社会秩序や突き破る1つのきっかけがここに与えられた」¹⁹⁾ことを示し、進学は当時の社会では将来を約束されたも同然の、大きな期待を背負ったものだった。

ラテン語学校を退学し放浪するクヌルプに対して、「ぼくたちの学校で続けていたのなら、万事違った結果になったに違いない」(SW3.197)と語る旧友は市井にとどまり生活を送っていくのであれば、ありえたであろう未来について語る。それはクヌルプ自身によって発話されず、他者の声によってなされることでクヌルプの中でいっそう反響する。三つ続けて引用する。

私（「クヌルプの思い出」における語り手）は言った。「クヌルプ、きみは思索者だ。教授になるべきだったね」

彼は笑って頭を振った。(SW3.186)

「君は牧師や教師にはなれなかったとしても、自然科学者とか詩人なんかにはなれただろう。僕は君が自分の才能（Gaben）を利用し、さらに鍛錬したかどうかは知らないが、君はそれをただ自分のためだけに使った、違うかい？」(SW3.196)

「お前は他の人よりも優れた才能を持っていた、だけれども何にもなれなかった。俺がこんなことを言ったとて、怒るんじゃないぜ」

するとクヌルプは微笑した。かつての無邪気な悪戯のかすかな光が彼の目に映っていた。(SW3.213)

詩人を除いた職業、教授、牧師、教師、自然科学者といった職業はギムナジウムを卒業し大学へ進学した先に得られる職業である。14歳でラテン語学校を退学したクヌルプは、こうした職にはつかなかった。それは最後の神との対話を見ても、彼がこの14歳を人生の転換点として考えていることは疑いようもない。クヌルプが思う「～になれた」とはどのようなことを意味するのか。もしこれが旧友の上記の発言と通底するのなら、その後の可能性はクヌルプがラテン語学校を退学したことによって挫折してしまった。そしてその可能性はギムナジウムを卒業し、大学へ進学することによって得られる「資格」によっていることがわかる。これはヘッセの伝記的事実や『車輪の下 *Unterm Rad*』の冒頭部分の描写と重なる。彼の地域では優秀な子供は神学校に入学し、チュービンゲン大学へと進み牧師か教師になることが常套なルートであった。それは「単

純ではっきりした生活」(SW3.210)であっただろうが、ヘッセも、ハンスもクヌルプもこうした生活や「資格社会」²⁰⁾にはうまく適合できなかった。

ラテン語学校退学の過程はロートフースや、マホルトから離れる場面と通じるところがある。「しまいにはただ一つの逃げ道を思いついた。なんのことはない、学校でもう勉強しないようにしたのさ」(SW3.199) 勉強を放棄した半年後、彼はラテン語学校を退学することになる。ここには『車輪の下』で学校を脱走し退学するような明確な逃避の跡は見られない、同級生は突然成績が下がり始めたクヌルプを不思議に思いながら、いつの間にか彼の姿は無くなっていた。彼の逃避は常に「いつの間にか」であることはこれまで見てきた通りである。学校から脱走するという突発的な線の切断ではなく、しばらくの間並走してから離脱する。

しかしそれから彼の人生はこの14歳の体験と向き合い続けることになる。クヌルプと神との対話はまさに14歳の体験から始まり、彼の人生を総括するように展開することになる。

神様とクヌルプは彼の人生の無目的について互いに話し合った。どうして彼の人生は別のように提起されえなかったか、なぜ人生はこうであって別ようになっていかないのだろうか、ということについても。

「あの当時のことです」とクヌルプは依然として主張する。「当時、私が14歳で、フランスカに見捨てられた時です。そこならまだ、私はどんなものにでもなれたかもしれないのです。それ以降、何かが私の中でだめになってしまい、やりそこなってしまったのです。それ以来私は完全に役にたたなくなりました。——ああ、何てことだ。間違いはもっぱら、あなたが私を14歳で死なせてしまわなかったことです。そうしたら、私の人生は熟したリングのように美しく完璧だったでしょう。」(SW3.214–215)

この会話においてクヌルプの人生は14歳を起点に他者や世間の価値観とズレ始めることがわかる。14歳の体験は彼の愛と人生の挫折の体験であって、ここへと常に立ち返ることによって送れたのかもしれない別の人生を夢想するのである。人生が無意味であること、別ような有意義な人生を送る可能性はまさに「14歳」の解釈にかかっているのである。彼にとってありえた人生は上述のような、進学を果たし大学卒業資格を手に入れて教養市民の一員となることであった。そのような生活になれば彼は放浪の月日を過ごすことなく、まったく異なる人生になっていたのではないか、そうした発想が彼に付きまとうことになる。神の発話はまさにこの問題を正確に見据え、クヌルプにこのように問いかける。

「さあ、もう満足するがいい」神は思い出させる。「嘆くことは何の役に立つだろうか？ 一切はいいように、また正しく起こっているということ、何も別ようにはならないということが本当にわからないのか？ 今さらまた主人や親方にでもなって、妻や子供をもって夕方に週刊誌を読みたいとでも？ そうしてもまたすぐに逃げ出して、森の中で狐と一緒に眠っ

たり、鳥の毳を仕掛け、トカゲに芸を仕込んだりするんじゃないのかい？」(SW3.216-217)

ここで神はクヌルプの人生を14歳で枝分かれする様には描いていない、むしろ退学を含めてなお、彼の生の舞台は自然に置かれていたのである。クヌルプの放浪は神の声によって運命化され、社会の身になったとて再び自然へと回帰することが予告されている。人生はいつも「正しく起こり」、彼の生活は「何も別ようにはならない」ことが了解されることで、クヌルプが悩んでいた岐は解消され、ここで一つの軌道へと統一されるのである。重要なのはこの総括は神の発言以前に彼自身によってすでに理解されていたということである。神はこれをはっきりと明示したに過ぎない。先の引用でマホルトがクヌルプに牧師や教師になれる「才能」を説いたのに対し、当てつけのようにクヌルプはこのように返答している。

「きみがいつてくれたような才能は、何かすごいもんじゃあない。僕はちよっぴり綺麗な口笛が吹けて、アコーディオンも鳴らせる、たまには短い詩も作る。かつてはよい走り手だった、踊りも悪くはなかった。それが全てだ。」(SW3.196)

クヌルプが何か才覚のある人物であるならば、それが発揮されるのは社会ではなく自然の側であった。ここでは彼の口から、自然と社会の環境の差異で自らの存在がどちらによりふさわしいかの理解が示されているといえる。しかし結論はここで明確な解答となるのではない、あくまで暫定的なものと見える。折り合いがつかないこの問いが、彼の人生に再帰的に何度も現れてくるのであり、神との対話に至るまで解消されなかったといえよう。

これまで見たように『クヌルプ』の他者は彼を制度を後ろ盾とした家庭・病院・社会へと据え付けようと努める。クヌルプの逃避は常に社会制度との違和から生まれたものであり、ここでその対立軸に自然が置かれてきたことも明らかである。彼は社会から離れ自然へと近づくことをその都度試みる、ではなぜ彼は自然の中に逃げ込み、そこで生を謳歌することを試みないのか。社会へと再び戻り、またそこから離脱し両者を往来する放浪の生活に身を晒すことを選ぶのか、それはクヌルプ自身が自然の中にもまた満足を見出すことができないからである。次節ではジョルジュ・ルカーチを参照しながらこの点を考察する。

4 社会から自然へ

4-1 ルカーチの「第二の自然」

哲学者ジョルジュ・ルカーチは『クヌルプ』刊行の翌年、1916年に『小説の理論』²¹⁾を発表した。本書では歴史哲学的観点から古代ギリシャの全体性を経て近代小説ドン・キホーテ、ドイツロマン主義、ゲーテ、トルストイといった作品を取り上げそれらを類型化し、分析していく。そ

の際にルカーチの議論の前提にあったのは「主体的な自我（Ich）が、客体的な世界（Welt）から疎遠になっている事態」²²⁾そして「全体性 Totalität」は回復することができないという点である。本節ではルカーチの「第二の自然 die zweite Natur」の概要を記述する。

ホメロスの叙事詩に代表される古代ギリシャはある調和を保っていた時代と解釈される。それは自我と世界、本質と生が同一性をもって円環を成している図であり、ルカーチ以前にはヴィンケルマンが見出し、シラーが「素朴」と呼んだものである。近代以降の小説はもはやこの調和を持たないけれども、「それでも全体性への思考を持ち続ける時代の叙事詩」なのである。しかし「叙事詩はみずからのうちから完結した生の全体性を形象化し、小説は形象化しながら生の隠れた全体性を見出し、組みたてようと探求」という試みは、歴史哲学的な「深淵 (Abgrund)」によってその失敗を露呈することになる。こうした世界の中で人間は「あきらかな目標の喪失と生の全体の決定的な方向の喪失」²³⁾を先験的に与えられているのであって、行為や世界の中に見出す形象の必然的な根拠を失うのである。こうした世界が先験的に与えられている事態をルカーチは「第二の自然」と呼んだ。人はその世界に法則性を見出し、行動や認識を行うことができるが、そこに伴う世界との意味は掴むことも出来なければ現れることもない。かつて世界と個人を完結したものとする運命の糸は途切れてしまい、主体にとって世界との運命は共同体の運命へと移行する。この世界では仮に法則が存在していたとしても、それは現在では慣習と呼ばれるものになってしまった。叙事詩であれば運命が決定していた人間の行動の法則を今は慣習が担っているのである。

世界から切り離され、「内面を目覚めさせることのない意味複合体」²⁴⁾の中に沈静しなければならない主人公は逆説的な運命として「孤独」を抱えることになる。これ以降の「長編小説の主人公は常に孤独な個人の主観」²⁵⁾から出発しなければならず、運命の力学のもと受動的だった叙情詩の主人公は、自らの理想や目的のために自ら外界へと探求を行わなければならない。ルカーチがロマン派を分析する際に「幻滅のロマン主義」として掲げたのは、「第二の自然」に幻滅するところから物語が始まるからである。しかしロマン派の文学はそこから内面への探究として物語を展開するが内面と外的世界が合一し、そこを運命が貫くような「第一の自然」へと到達することはできない。この「第一の自然」と「第二の自然」の距離とは歴史哲学的に策定されたものであり、古代ギリシャと現代の距離そのもののなのである。

4-2 クヌルプの自然

ヘルマン・ヘッセにとっての自然とは小説、詩、絵画、庭仕事等でその都度かたちを変えながら彼の前に現れるモチーフであるため、本稿でその全体を扱うことはできない。丹治が詳しく分析するように、一方では1頁の中で20以上の植物に関する名前を挙げながら具体的に描写する彼の視線は、もう一方で抽象的な総体としての自然を見据えている²⁶⁾。『クヌルプ』においてもその両者、具体的なものと抽象的な自然は併存している。本節では『クヌルプ』における自然が想起の機能を持ち、彼の故郷または幼少期への通行路となっていることを示す。

横山は『クヌルプ』において「子ども時代（体験）」と「故郷（風景）」が結びつくことで「原風景」を形作っており、これが引力となり「ヘッセの心は常に南独の原風景に結びついていく」²⁷⁾と指摘する。そして細井の指摘を受ければ「子供」を純粹無垢の象徴として社会が捉えるようになるのは18世紀後半以後であり、ルソーからヘルダー、ゲーテを經由してロマン派において子供の中に「想像力、無垢、人間の過去と未来、完全な人間」²⁸⁾を見る傾向が一般的になったのである。つまりロマン派以降の幼年時代への回帰願望と、リアリズムとしてのヘッセの故郷の自然描写が重なるところに、彼のとりわけ前期の作品の特徴がある。そして「しかし、第一次大戦を境に、もはや子供時代に帰る事は不可能であるという事実が確認される。過去の樂園を取り戻したいと望むのは無意味であり、むしろ大人は墮落した現在の生を生き抜くことによって、より高次の子供時代、永遠の樂園に到達するべきであるという新たな目標が示される」²⁹⁾とされ、第一次世界大戦を機に幼年期は回帰から到達へと運動の質を変えることになる。その意味では『クヌルプ』は『車輪の下』では描くことができなかった少年時代への懷古を、14歳以後の生を生きること以最も純粹に表現したものだといえるだろう。

以下はクヌルプが故郷ゲルバースアウへ帰郷するとき、そこでかつてあった街や庭、自然の風景から彼が当時過ごしていた幼年期を想起する場面である。

どの猫がいるかを知らない屋根などはなく、その果実を食べていない庭などなかった、彼が登ったことのない木もなく、その花冠に緑の夢の巣を作ったものだ。こうした世界の一片は彼のものであり、最も深い親密さの中で彼によって知られていた。ここではどの藪も、また庭の生垣も彼にとって意味と意義と歴史を持っていた、雨や雪が降るとその滴は彼に話しかける、ここでは空気や大地が彼の夢や願望の中で生きていた。それに応答し、その命と共に呼吸したのである。今日でも、ひょっとしたら周りに住んでいる人や庭の所有者であっても、彼よりも全てが彼のものであることはなく、それが価値を持つことも、話しかけることも、それに応えることも、思い出を起こさせるものはなかった。(SW3.208-209)

屋根や生垣や樹木の細部はクヌルプをかつて彼が過ごした芳醇な幼年時代へと遡及させる。ここでは猫一匹、実った果実ひとつひとつが具体的に彼の感覚に適うような体験としてクヌルプの前に現れる、その個別特殊性をもって彼をむしろ抽象的な故郷へと連れていくのである。この故郷への感覚は世界の全体性へと開かれた感覚に接続している、この全体性の中では部分は常に「意味」と「意義」と「歴史」を担っている。部分と全体は一つの連関を持ち、意味の往復が彼を中心に展開し閉じた円環をなしているのである。彼の故郷を構成している自然が郷愁という追想によってまとめ上げられるところで、彼は当時の自然や世界と親密な「つながり」を見出す。クヌルプの憧れていた故郷は過ぎ去った抽象的なものであったが、そこへ到達する想起のきっかけは現在の具体的な景観描写であるという点で、両者を惹きつけて留めるのは「自然」の機能である。

この描写はルカーチのいう「全体性」が達成されているといえるが、これが追想の中で沈澱するものだという点で未完成でもある。これは幼年期への回帰し得なさでもある一方で、それを支える「自然」への到達し得なさでもあった。それは結局のところクヌルプが「第二の自然」に身を置く以上、不可避の事態であり世界との「つながり」を保ち得たのはその時点のみだったのである。彼は故郷でこのように回想する。

ラテン語学校を追い出されるより前に、この土地（故郷）でクヌルプはもっとも楽しい日々を享受した。そこではかつて満ち溢れる幸福、余りのない完全な充実、苦味のない歓喜というものを味わった。(SW3.208)

クヌルプがラテン語学校を退学するその時点が、まさに「全体性」の崩壊、「第二の自然」の誕生であって、彼がもうそれ以前には決して戻ることのできない幼少期を規定する体験だった。世界が彼に対して開いていたのは幼少期のみであり、それ以後の生は慣習の世界の法則に身を置くか、局外者になるしかなく、かつてあった世界との繋がりと再び邂逅することは不可能であった。

我々はここで『小説の理論』と『クヌルプ』の同時代性に注目しなければならない。両者は社会が近代化し複雑化する中で、従来の自然の領域、そこで働いていた感情が疎外されていく感覚があった。そこでは同時に社会の中の法則、慣習が個人の前に前景化し個人の生きる意味や内発性を、仮象としての社会の中に見出すことができないとすれば人生の意味は袋小路に迷い込んでしまう。そこを抜け出す「第二の自然」の外部はもはや現代の人間には到達不可能であり、人々はその間で停滞することしかできない。これが一つの時代状況を含んだ一般的な価値観であったとするならば、『小説の理論』と『クヌルプ』は異なった文脈を背負いながらも同様の問題を扱った理論と作品として並置することが可能であろう。クヌルプが自然にも社会の領域にも定住せずその間を放浪するしかないことは、この物語が紛れもなく時代の中で書かれたことを示している。

4-3 クヌルプの足跡

彼の逃走先である自然への到達は未完成なものとして終わった。自然と社会の間で停滞することはクヌルプの放浪する人生の結論であった。しかし、物語自体の結論はまた別の方向へ向かう、そこを補完するのは彼がこれまで避けてきた他者、それらを統合する神の声である。この時、クヌルプの放浪が「孤独」な「寂しい」ものから、その過程で他者に残した足跡の読解へと開かれていくのである。その上で重要なのは最後の神との対話である、神は彼の人生の傍観者としてこのようにいう。

「いいかい」神様は言った。「私は何者でもないお前自身を必要としたのだよ。私の名にお

いてお前はさすらい、定住している人々にいまだに自由への懐かしさを持ち帰らなければならなかったのだ。」(SW3.217)

クヌルプは漂泊の生活の中で、交流した人々に「自由への懐かしさ Heimweh nach Freiheit」をもたらしたという。それは誰もがかつて持っていたような自由であり、彼の足跡から受け取るものでもある。体を壊しながらも放浪する宿命を背負った彼のことを人々は心のどこかで軽蔑していたとしても、彼から自由人としての憧れと、彼の魂にある孤独、結ばれた絆を受け取った。そうしたことが可能なのは彼の人生が遠くから見れば滑稽であったとしても、そばに寄れば他者は何かに深く悩み、苦しむ1人の人間のリアリティを看守するからである。その意味で彼への憧れとは倒錯的なものである、つまり定まった家も職も友も持つことなく放浪を続けるクヌルプは経済的にも身体的にも自由ではあり得ない、苦勞の耐えない日々である。「かわいそうなやつ」(SW3.202)とマホルトが言ったのはそのためである。だがそこまで不自由な環境に身を置いてなお、彼の行動、態度は自由なものに感じられる。それは彼の存在が自由なのではない。彼の足跡が自由へと向かっているということである。前章までは彼が退けてきたルートを辿り直そうとしてきた、しかしそれは同時に彼の意志とは相反しながら自由への軌跡でもあったのである。

神の声とはこの両者を調停しようとする、そうした位置から発せられている。「14歳」の体験は彼の人生を社会から遠ざけ、自然へと接近させる契機であった。幼少期にもたらされたこの出来事の延長としての、それ以後の生は彼が選んだのか、放浪する生は彼が望んだものだと捉えられるのか。クヌルプが他者と交流する際に生まれる齟齬は、まさにこの解釈の齟齬であり、彼は社会を捨てたのか、それとも社会から見捨てられたのだろうか。しかしこの問いは「逃げること」が徐々に姿を変え「自由への足どり」となること、または人々が彼の身振りから足跡を辿り直しその行き先を予感すること、以上が神の声によって合一されることに一応の解決を見る。もちろんクヌルプがそのように考え続けていたわけではない、ただ「逃げること」がいつの間にか別の目的地へと向かっていることが他者の声をもって了解されたということである。

神はクヌルプを人々へ何かを「与える」存在として描き直した。クヌルプの振る舞いは、彼が意図しない方向で人々の解釈を誘う。最後にクヌルプが雪の上で倒れて亡くなる場面について図越は「明るい光のもと」に置くことで「死を安らかな眠り」³⁰⁾として描きだしていることが、社会との妥協ではなく自然のもとに身を置く隠喩だと言及している。谷はさらに踏み込んで、春が来てクヌルプを覆う雪が溶けるとそれを発見する人々に「自由の死」³¹⁾を届けることになることを推論している。神の声は他者がクヌルプの中に「自由そのもの」を見出しているということに、「極端な体験」としての人生の終末、つまり彼の生涯全体を救済しえる認識として提示したのではないか。神は彼の人生が完結した後もまた人々に何かを届けることになることを預言する。ここで「人生の無目的」さが彼が避けてきた他者によって、意味あるものと変転しクヌルプはその認識と共に生涯を閉じるのである。

おわりに

ヘッセの『クヌルプ』は『のらくら者』以降の急変する19世紀後半のドイツを舞台に設定している、クヌルプはこうした社会で他者と同調することができない。なぜなら彼が愛や死や人生について語ろうとする時、他者はそれらを制度の枠組みの中で理解しようと試みるからである。対話はうまく行かずに、彼は自然へと逃避する。しかしルカーチの議論を参照しながらクヌルプは自然への到達不可能性の前に停滞し、行方のない放浪の生活を送ることになる。ここでは『クヌルプ』が従来考えられてきた抽象的な宗教文学としての寓話は影を潜め、むしろ現実との違和に根差した作品だと捉え直すことができる。

やや拡大して言えば、『クヌルプ』のこうした発想は、従来の自然と社会という対立がもはや彼の小説では有効ではなくなる傾向の一端だといえるだろう。『車輪の下』では学校や社会からの明確な逃避先として自然が捉えられていたのに対し、『クヌルプ』では社会と自然の間で、逃避先を見出せない主人公の感性が強調される。これ以降は『荒野のおおかみ *Der Steppenwolf*』のような都市の中で逃避先を失った人間の孤独が主題化されていく。もしこれを逃れる方向があるとすれば、『ナルチスとゴルトムント *Narziss und Goldmund*』『シッダールタ *Siddhartha*』といった中世ヨーロッパや太古のアジアを舞台とする作品、もしくは幼少期やその神秘性を強く打ち出す『メルヒェン *Märchen*』といった作品群である。古代や幼少期はいずれも全体性の探究が可能となる時空間という点では一致する、少なくとも全体性への指向が彼の文学の一端にあると、ひとまずは指摘することができるのではないか。

『クヌルプ』をこうしたヘッセの個人史の中で考えるならば、この作品は全体性の探究の純粋な試みであり、また挫折であるといえよう。Unseldeの整理によれば『クヌルプ』の萌芽は1902年にすでに認められ、1902年から1914年にかけてその創作意識は持続していた。³²⁾ ならば『クヌルプ』は作家として名を築き、第一次世界大戦を迎えるまでの期間の総括となる作品であり、またそれ以降の多様な実験的な創作の原点でもある。そうした意味で、この作品の主題や意義はこれからも多方面から検討され続けるだろう。

註

- 1) Hermann Hesse: *Knulp. Drei Geschichten aus dem Leben Knulps*. In: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Herausgegeben von Volker Michels, Bd. 3, Frankfurt am Main 2001. 以下、不明瞭でない限り作品名は『クヌルプ』と表記する。ヘッセの引用は同全集から行い、引用に際してはSWと略し引用箇所を巻数とページ数を記載する。
- 2) ベルンハルト・ツェラー『ヘッセ』（井原恵治訳）理想社1981年、192頁。
- 3) 井出貴夫『ヘルマン・ヘッセ研究 第一次世界大戦終了まで』三修社1982年、428-430頁。
- 4) Vgl. Hermann Missenharter: *Hermann Hesse im Spiegel der zeitgenössischen Kritik*. Bern und München 1975, S.138.

- 5) Mark Boulby : *Hermann Hesse. His mind and art* . Cornell University, 1970. p. 77.
- 6) 沖伸一「『クヌルプ』(ヘルマン・ヘッセ作)における故郷喪失について」『近畿大学九州工学部教養論集』近畿大学九州工学部教養課程編 3 (3) 1981 年、1-18 頁。
- 7) 横山滋「クヌルプ小論」『武蔵大学人文学会雑誌』武蔵大学人文学会編 11 (2~4) 1980 年、37-55 頁。
- 8) Jenna Gersie : *Returning Home: Reinhabiting a Life-Place in Hermann Hesse's Peter Camenzind and Knulp in: Interdisciplinary Studies in Literature and Environment*, Volume 29, 4. 2022, pp. 1249-1266.
- 9) ラルフ・フリードマン『評伝 ヘルマン・ヘッセ ― 危機の巡礼者 上』(藤川芳朗 訳) 草思社 2004 年、212 頁。
- 10) 青島雅夫「ヘルマン・ヘッセの作品と伝記に見る整合と相違 II.『クヌルプ』の場合」『言語と文化』創刊号 関西学院大学言語教育研究センター紀要委員会編 1987 年、297-307 頁。
- 11) 1875 年のライヒ民事婚法の成立により「身分と宗教の相違を超え、また生計の危険負担を全て個人の判断に委ねる、「婚姻締結の自由」が制度化」することになる。こうして婚姻に関してこれ以降は国家が管理する対象となると同時に、人々の結婚行動を変化させることになる。―― 以下を参照 若尾祐司『近代ドイツの結婚と家族』名古屋大学出版会 1996 年、143 頁。
- 12) 識名は 19 世紀末のドイツ文学においてフォンターネ『エフィ・ブリースト *Effi Briest*』(1894/1895) やリヒャルト・デーメル「浄められし夜 *Verklärte Nacht*」(1896) といった作品を挙げて、この時代に「理想的な結婚生活」が破綻し、女性が本来性を求めて不倫へと向かう傾向を指摘している。―― 以下を参照。識名章喜「『愛』を語ることを忘れたドイツ人：ドイツ「恋愛」文学史の試み」『慶應義塾大学商学部創立 50 周年記念日吉論文集』2007 年。
- 13) 大河内泰樹『国家はなぜ存在するのか ヘーゲル「法哲学」入門』NHK 出版 2024 年。
- 14) ミシェル・フーコー『フーコー・コレクション 6 生政治・統治』(小林康夫／石田英敬／松浦寿輝＝編) ちくま学芸文庫 2006 年。
- 15) 「ドイツ帝国創設の 5 年後の 1876 年に、帝国全土には 3000 の病院施設が確認され、それらに総計 14 万 1000 床ほどがあるにすぎなかった。わずか 24 年後には、病院数はすでに 6300 に増加し、病床数も 2 倍をはるかに超えて 37 万床を数えた。」―― 以下を参照。ヴォルフガング・エッカルト『医学の歴史』(今井道夫・石橋隆司監訳) 東信堂 2014 年、273 頁。
- 16) アルス・モリエンディは人生の最期である死を焦点化し、良き死＝美しい人生と捉え、具体的な臨終の間際の手引書を記す。死に際で天使と悪魔が戦っており、これをいかに救済するかがその関心ごとであった。―― 以下を参照。鈴木 桂子「アルス・ヴィヴェンディ、アルス・モリエンディ：西洋中世にみる良き生と死への手引き」『死生学年報』東洋英和女学院大学死生学研究所編 2014 年、25-49 頁。
- 17) Vgl. Christiano Immo Schneider: *Das Todes Problem bei Hermann Hesse* , Marburg 1973, S.284.
- 18) ペーター・レントグレーン『ドイツ学校社会史概観』(望田幸男 監訳) 晃洋書房 1995 年。
- 19) 望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史』ミネルヴァ書房 1989 年、43 頁。
- 20) 一般に近代社会は階層編成の原理として、一方で身分制を否定して、他方で教育資格あるいは学歴を中軸に据えた社会であり、その意味で「資格社会」といってよい。しかし「序章」で述べた様に、ドイツ近代社会は単に教育資格を中軸に据えたばかりではなく、特定の教育資格は特定の職業資格の受験資格となっている。つまり〈職業資格〉＝〈教育資格プラス職業資格試験〉という方程式の多くの束によって覆われた典型的な資格社会である。―― 以下を参照。望田幸男編『近代ドイツ＝資格社会の展開』名古屋大学出版会 2003 年、356 頁。
- 21) ジョルジュ・ルカーチ『ルカーチ著作集 2 小説の理論』(大久保健二・藤本淳雄・高本研一 訳) 白水社 1968 年、54 頁。
- 22) 堀田明「アドルノ「自然史の理念」における近代性：小説形式における自我と世界のあいだの深淵に

ついて」『広島ドイツ文学』34号2022年、99-116頁。

23) ルカーチ前掲書、58-60頁。

24) ルカーチ前掲書、62頁。

25) 北村憲司「初期ルカーチにおける全体性概念」『哲学』三田哲学会編集委員会編95号1993、59-84頁。

26) 丹治信義『自然が語る——ヘルマン・ヘッセの世界——』溪水社2002年。

27) 前掲論文 横山滋「『クヌルプ』小論」——「原風景」は奥野健男『文学における原風景——原っぱ・洞窟の幻想——』集英社1972年からの引用

28) 細井直子「二つの楽園——ヘルマン・ヘッセにおける「子ども時代」」『藝文研究』1988年、341-358頁。

29) 同上。

30) 図越良平「ヘルマン・ヘッセの『クヌルプ』について」『人文研究：大阪公立大学大学院文学研究科紀要』大阪公立大学大学院文学研究科編36(10)1984年、743-758頁。

31) 谷進「クヌルプ論」『京都外国語大学研究論叢』京都外国語大学機関誌編集委員会、京都外国語短期大学機関誌編集委員会編9号1967年、30-39頁。

32) Vgl. Siegfried Unseld: *Hermann Hesse, Werk und Wirkungsgeschichte*, Shurkamp, 1985.